



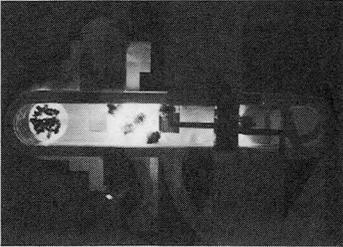
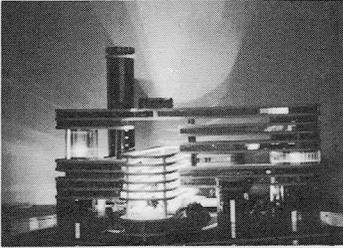
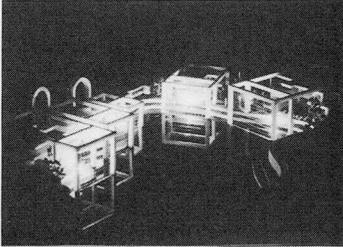
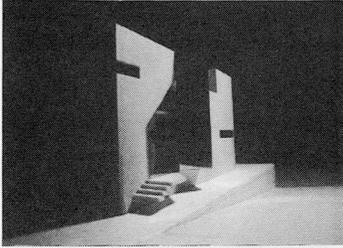
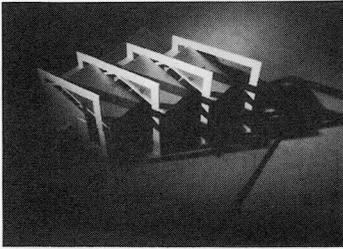
Title	彷徨の中の産物 RC住宅4題
Author(s)	内海, 和雄
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 140-147
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52574">https://doi.org/10.18910/52574</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 彷徨の中の産物 RC 住宅 4 題



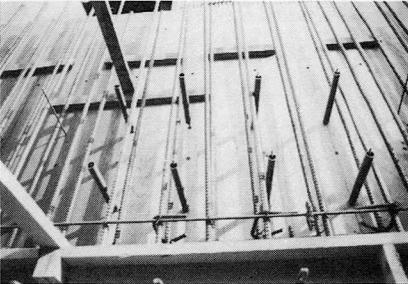
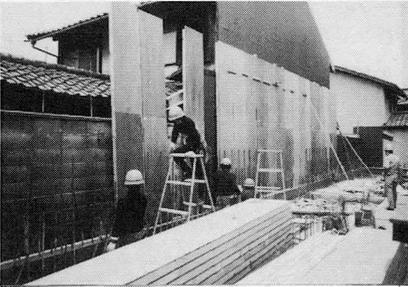
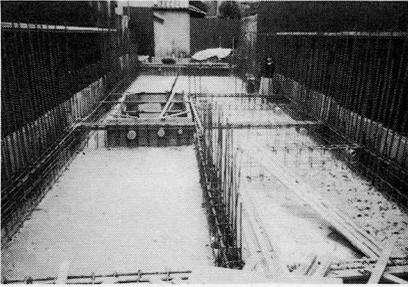
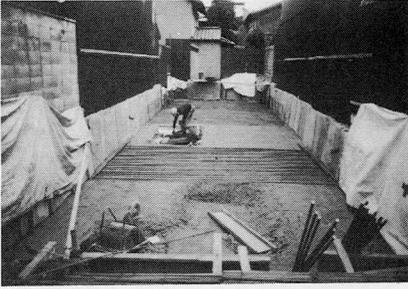
## 内海 和雄

何かを創ろうとして、すでに20年。数多くの挫折と僅かのよるこびの断片を引きずって、今……。

計画狂い。形狂い。誰それ風。カオスの中の惑い。拭い切れぬ雑多な欲望……。

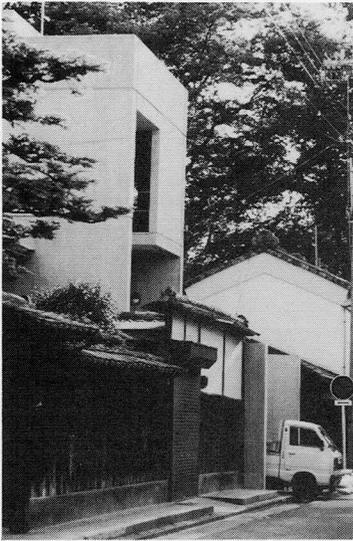
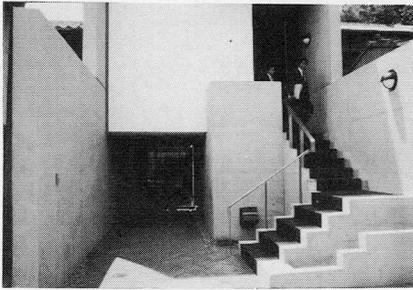
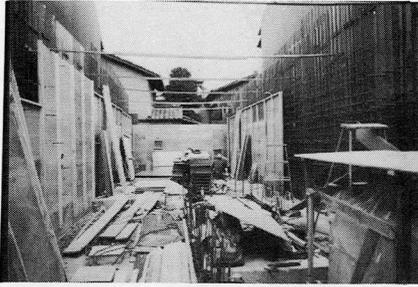
ほんの20数年前の時代には、モダンデザインに対する信仰心が、我々の心の中を堂々と支配していた。いや、現在においても決して崩壊しきったわけではない。しかし、かの健康なるモダン信仰は、底辺の作品群の持つ、異常なる感染力を伴った自壊作用と、新たなる“敵”の為に、今静かに崩れ落ちつつあるのだろうか。でも、“ポストモダン”と言われる諸々に代表される一般的には弱々しげなデッサン力に支えられた造形物達に、どうしてあれだけの諸先輩の知恵と100年近い蓄積の賜が、いとも易々と翻弄されなければならないのか。突っ込んだ議論はまだ聞かない。とにかく考えてみたい。いったいモダンデザインのどの部分がまずく、或はどういう点が時代に背いたとみなされたのであろうか。ここ数年間の我が仕事の模型と、現実の住宅4例をあげ、彷徨のさなかの研究報告に代えたい。

## 試み

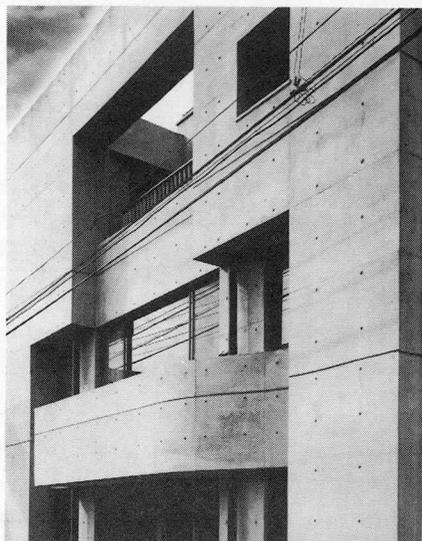


京都 佐藤邸（俵屋本宅）  
構造：鉄筋コンクリートボックスカ  
ルバート構法3階建  
工期：6ヶ月  
施工：竹中工務店

間口3間、奥行13間の、典型的な京の町家の敷地。元の長屋を切り取ってそこにコンクリートのボックスを挿入するというプロジェクトである。長屋の一部を切り取るということは、隣家との境界線上の芯に建つ共有の柱は、当然そのまま置いておかななくてはならない。基礎に関しても、同様である。即ち、権



利としての敷地面積は、その柱芯で計算できるのであるが、実際建てるこちら側の壁は、そこから控えて建てなくてはならない。木造の場合、昔は平面上で壁を造り建て起こす工法や、人が作業出来る3尺程度離して造り、スライドさせて隣壁にあてがう工法等があった。鉄骨造の場合も、同様の仕様はむろん可能である。ここで問題なのは、コップの様に下部と、側面で構成された器状の枠を必要とするコンクリート造の場合である。当然、この側面を構成する型枠には支持材を要し、特に外壁側には、型枠支持材に加えるに、人が作業する巾を持った作業台と昇降の為の階段が必要になってくる。この僅かな間口、しかも両サイドにこれだけのスペースは取れない。結果考えたのが、型枠の締め付け金物を内側から取り外しの利く塩ビパイプを利用した特殊な型枠金具である。隣家いっばいに建て込まれた一階分の型枠にコンクリートを打ち、固まった段階で内側からその締め金具を抜き、外型枠はそのまま二階にスライドさせて持ち上げる。そのままその外型枠を、特殊金具で内型枠と緊結し、二階のコンクリートを打つ。三階もその繰り返し。ある種のスライディングフォーム工法である。尚、狭い間口方向にも支持壁の必要な、いわゆる壁構造もこの敷地に不向きなことから、京都では例の無いトンネルと同じ構法を採用し、確認申請に少し手間取った。計画上の配慮としては、奥庭まで見通せるプランと、中庭に落葉を含む雨水を全て集め、壁面レリーフの雨どいと酒落たこと。



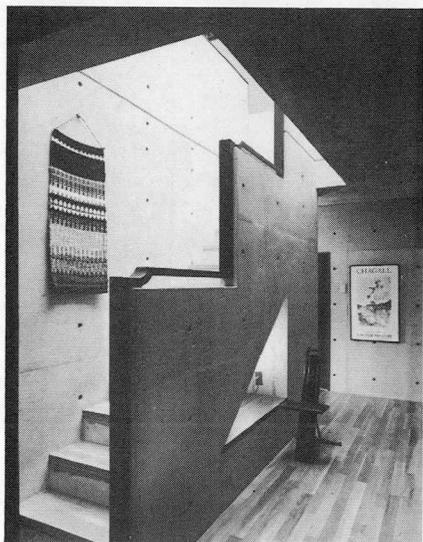
## まんま

千里山 ギャラリー・ル・パルク (兼 三原邸)

構造：鉄筋コンクリート壁構造  
3階建

工期：6ヶ月

施工：堀田工務店



前面道路の前に小さな川があり、これがなぜか一級河川。その為地下室を設けにくかったこと。施主が経営する裏手のアパートの、消防車非常用進入路として、敷地北側を大きく削られたこと等により、敷地いっぱいの三階建となった。二三階に住居階を持ってゆき、一階を夫人の経営するギャラリーと喫茶室とした。住居階は、隔壁を多く要する個室群を下階に、おらかな空間的つながりの欲しい居間や食堂を上階に計画することにより、コンクリート壁構造の属性に対応した。これは、将来の近隣の変化による影響も、最小限に抑えるべく、大きなトップライトの設定をも可能にした。動線的な工夫としては、二階に玄関があることから、昇りに要する段数の1/3程度の段を、玄関扉を開けて、靴を脱いでから数段昇るという行為を挿入することにより、一気に一階分昇らねばならぬという、気分、動作を含めて、緩和出来たと思う。これは前述の佐藤邸や後述の玄珠三軒長屋にも使っている手法である。

# 思い

京都 玄塚三軒長屋

構造：鉄筋コンクリート壁構造3階建

工期：7ヶ月

施工：熊田工務店

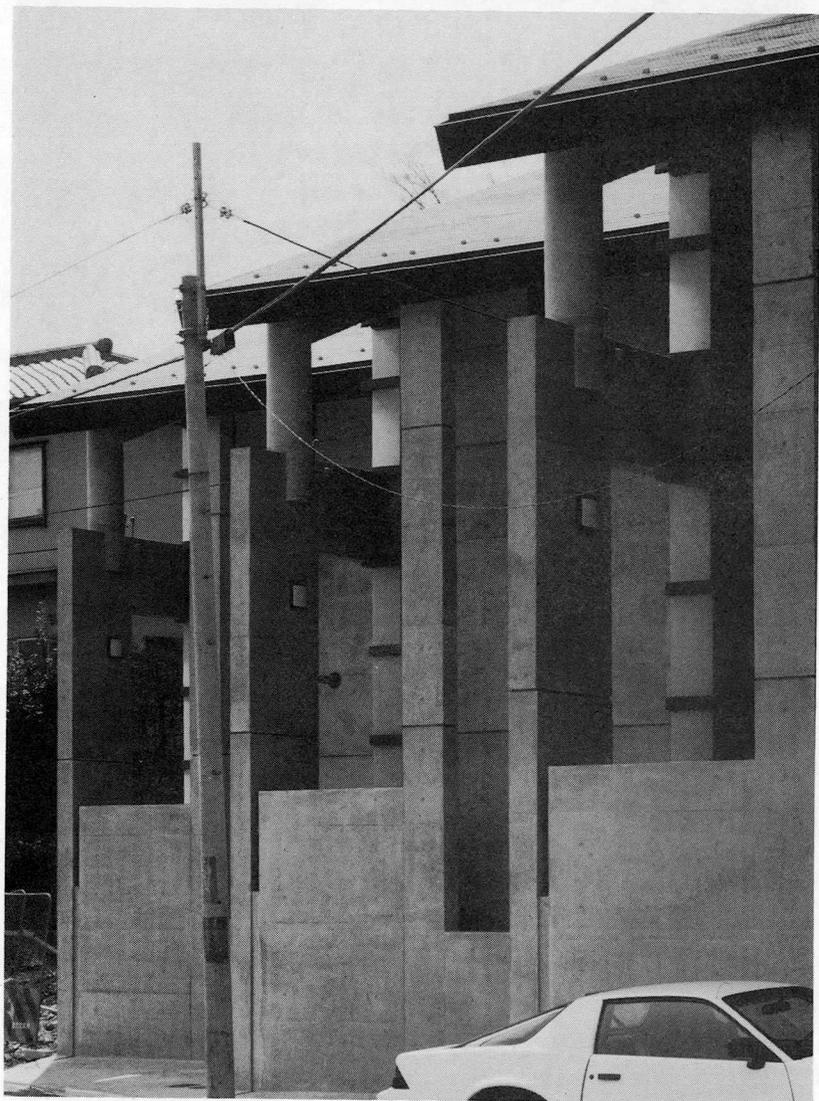
京の北西に位置する優しい鷹ヶ峰を背に、この三軒長屋は建っている。同じ敷地の後ろに控える瓦屋根の家は、先代土橋嘉兵衛が親交のあった河井寛次郎や、柳宗悦らの手になるもので、町屋とも民家とも思える不思議なおおらかさを見せて、静かに眠っている。

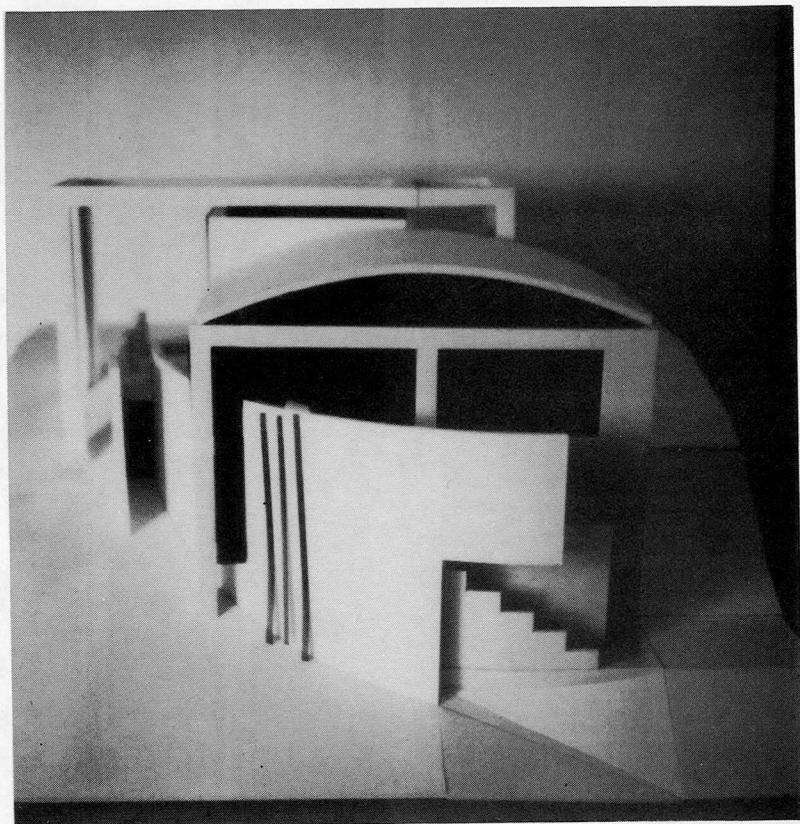
この静かなるべき玄塚の地にも、時代の波は確実に押し寄せてきている。

初めにこのお話があった時、いろんな意味で考える事が多かった。そしてその時代の渦中に生きている自分とこのプロジェクトを、冷徹に客観的に位置づける自信の様なものがほのかに見えるような気分になれたのは、型枠も外れ、ボリュームとしての建築躯体が、この斜面にどっかりと腰を据えた去年の暮れくらいであっただろうか。寒風の中まだ若い現場監督が、頬を真っ赤にしながら立ち働く姿は、私のなかの、もやもやした悩みを、一時でも癒してくれた。

しかし現代という時代を背負ってなにかつ、古き良き環境に敬意を表したい気持ちが、どの程度形として表し得たのか。また遠き未来は、この罪多きカオスの時を、如何なる目で、俯瞰するのか、まだ見えぬ事が多過ぎる。







## 逆手

目神山 矢崎邸

構造：鉄筋コンクリート柱梁構造4層

工期：7ヶ月

施工：中野工務店

甲陽園に近く、すぐ南に甲山を望む、まだ緑に包まれたこの目神山は、阪神地方に残された数少ない良い環境を保つ住宅地である。しかし現地を見ると、ここまでもと思えるくらいの、山の斜面であった。平均斜度は約30度。前面道路と、敷地の最高部のレベル差が、15M。しかもこの近辺では、直径3M程度の大岩がゴロゴロしていて、どう考えても平坦地での施工より、30%は、基礎に余分に費用がかかるようにみえた。資材搬入を考慮すると、ますます不利である。そこでまず、この程度の斜面に当然必要であるはずの過大な基礎部分を、全て部屋として使えるような構造に出来ないものかと考え、一般的に住宅に应用される壁構造をやめて、壁を、

一般荷重から解き放つ柱梁構造を選んだ。即ち模型でのエレベーション（東面）に見られるように、大地に踏んばり、床天井を支える3Mグリッドの柱梁ラーメンのフレームと、構造から解き放たれた壁とで、この住空間は構成されることとなった。つまり下部2層は基礎を兼ねた地下室のごときのものであるが、有効採光や通風等を含む建築基準法上の条件は、西面に設けたドライエリア等で十分クリア出来た。また、ここ西宮市の条例で、建築物の斜面方向軸で大地に接している部分は、その高低差を6M以下にしなくてはならないとある。これも、基礎構造である柱梁レームを少しでも大地に踏んばるように斜面方向軸の一方である西面に張り出し、構造と無関係な西面外壁との隙間を、ドライエリアとして扱うことにより、高低差6M条例もクリア出来た。敷地内の露出した大岩は、そのまま大浴室の壁面として利用する。このような事から予想外の安価で、このプロジェクトは今進んでいる。竣工は来年春。

撮影 松村芳治  
柄松 稔  
内海和雄